

〈研究ノート〉

ピア・ラーニング活動を主軸とした交流授業の試み

ーキャンパスの国際化に向けた留学生と日本人学生間の主体的な交流を目指してー

大塚 薫
山口 俊博
金 才 鉦

要 旨

本研究は、キャンパスの国際化の一環として留学生対象の上級日本語授業において、「国際共修」の試みである留学生と日本人学生との交流授業を行い協働学習をすることで、いかに学生が主体的に授業に参画できるかを実践した上で検証し、教育現場での交流授業のあり方を模索したものである。具体的には、2022年度後期に行われた論理的な文章力および発表する能力の習得を目的とした留学生対象の上級日本語の授業内で、留学生と日本人学生の協働学習を主体とした交流授業が3度にわたり実施された。

今回の3回行われた交流授業に対する参加した学生の評価の平均値は5段階中4.4で好評価を博し、オンラインによる遠隔交流よりも対面での交流のほうが評価が高かった。海外の同世代の学生とのピア・ラーニング活動を主軸に据えた授業設計によるクラスの雰囲気づくりや話し合い・発表を通じた異文化理解の視点の獲得、新たな価値観の創造等が利点として挙げられた。協定校の学生に対しては高知大学の学生との交流を体験してもらうことにより、高知大学への留学を促す効果があり、高知大学の学生にとっても協定校の学生と交流することでグローバルな視点を獲得することに役立った。さらに、日本人学生も授業に参加し、学習指導のチューターとしての役割を果たすとともに異文化を理解する機会となった。交流授業では、参加学生の授業を受ける際のモチベーションが通常時より高まり、主体的に授業に取り組む姿勢が見られた。

【キーワード】

交流授業、ピア・ラーニング活動、キャンパスの国際化、国際共修、協働学習

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、日本では2020年4月から外国人留学生の円滑な受入れに支障をきたしていたが、2022年10月には日本政府の水際対策も緩和され、高知大学では交換留学生も通常通り学期初から入国でき（表1参照）、授業も講義室内の人数を制限して原則対面教育で行われるようになった。また、日本人学生の海外派遣に関しても徐々に新型コロナウイルス感染症の拡大以前の状況に戻りつつあるものの、未だ留学を躊躇する学生も少なくない（表2参照）。

表1 高知大学における留学生の受入れ数の推移 各年5月1日現在

年度	学部	修士課程	博士課程	交換留学生	研究生	合計
2017	39	15	31	36	9	130
2018	30	18	35	51	6	140
2019	27	20	31	38	9	125
2020	30	15	30	24	9	108
2021	28	15	27	14	2	86
2022	34	14	28	9	6	91
2022.10月	33	14	27	27	11	112

表2 高知大学における交換派遣学生数の推移¹⁾ 各年5月1日現在

年度	アジア	米国	欧州	アフリカ	合計
2017	13	0	4	1	18
2018	10	3	13	1	27
2019	7	2	10	1	20
2020	1	0	1	0	2
2021	1	0	0	0	1

このような状況下であり、キャンパスの国際化を図るためには留学生と日本人学生が交流する機会を確保し、互いに異文化を知り認め合う機会を提供し、グローバルな視点や柔軟な思考力を養うことが必要となる。高知大学においても、外国人留学生の学習面を主にサポートするチューター制度（大塚、2010、2013、2016）や留学生と日本人学生が互いに精通した言語を教え合うパートナーシッププログラム、日本や地域の文化・歴史等を学び、理解を深

めた上で互いの親交を深める目的で行われる見学旅行での日本人学生との交流（大塚・林, 2018）、協定校と連携した国際交流セミナー・イベントでの交流²⁾等が行われ、キャンパス全体を通して国際化を図る「内なる国際化（Internationalization at Home; Nilsson, 2003）」の機会の提供に努めてきた。しかし、コロナ禍においては主にオンラインで交流が行われたこともあり、イベントに参加する学生の固定化やオンライン疲れによる参加人数の減少、学生への周知の難しさ等もあり、学生の交流に対するモチベーションの維持が課題として浮かび上がった。このような中で、学生のニーズに合わせたキャンパスの国際化の促進の方案として、学生の日常生活の一部である授業を介しての交流を企画し「内なる国際化」を推進するべく「国際共修」というアプローチによる授業実践を行うことにした。

ここで言う「国際共修」とは、異なる背景の学生がともに学び合う形態の授業であり、「国際共修」という方策を用いた授業実践は、様々な大学で行われている（末松・秋庭・米澤, 2019、高橋, 2021、林, 2021、林・大塚, 2022）。末松他（2019）では、「国際共修」を以下のように定義しており、本稿もその定義に従うものとする。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。（p.iii）

本研究は、キャンパスの国際化の一環として2022年度第2学期に共通教育で実施された留学生対象の上級日本語授業において、「国際共修」の試みである留学生と日本人学生との交流授業を3度にわたり行い協働学習をすることで、いかに学生が主体的に授業に参画できるかを実践した上で検証し、教育現場での交流授業のあり方を模索したものである。

2. 交流授業が行われた上級日本語授業の概要および実践状況

2022年度第2学期は全学的に原則として対面教育が実施された。今回交流授業が行われた上級日本語授業である共通教育日本語Ⅲにおいても、語学の授業であり受講生も少人数であったため、教室で受講する学生数を通常の3分の1とし感染対策を徹底した上で対面授業が行われた。

2.1. 上級日本語授業の概要および目標

本授業は、外国人留学生対象の上級レベルの日本語科目で、共通教育で開講されている正規の語学授業のため、週2コマ90分授業が15週間行われ16週目は期末試験が実施され計31回で構成されている。学習者は、学部の正規生3名（中国・韓国・マレーシア各1名）と特別聴講学生（交換留学生）1名（タイ）が受講した。受講生のレベルは、日本語能力試験N2からN1レベルであり、正規生は各々日本語以外の専門があり、特別聴講学生は日本語を専攻している学生であった。授業の目標としては、論理的な文章を書く力を養うとともに、自分の考え、意見を論理立てて発表する能力の育成を目指しており、その目標を達成するために学習者が協働しながら互いに学んでいくピア・ラーニング活動を取り入れつつ授業を進めていった（表3参照）。

表3 上級日本語授業の概要

授業科目名	共通教育日本語Ⅲ
実施期間	2022年10月4日～2023年2月3日
授業時間・回数	週2回90分 全31回
授業場所	対面：留学生講義室、オンライン：Microsoft Teams・ZOOM
受講生	留学生4名（中国・韓国・マレーシア・タイ）
受講生のレベル	日本語能力試験N2～N1
授業方法	原則対面教育で実施し、教室で受講する留学生4名に対して教材での指導やペアワーク・グループワーク・討論等協働学習、発表

2.2. 上級日本語授業の内容

今回交流授業が実施された上級日本語授業の内容は、表4のとおりである（表4参照）。本授業は、論理的な文章力および発表する能力の習得を目的として、学習者主体の双方向型の活動をベースに設計された。対面授業をサポートするシステムとして大学が推奨するMicrosoft Teamsを使用し、教材は配布するとともにTeams上に掲載しておき、事前に予習しておくことを前提

とし、授業では学習内容の実践的な内容を教員と学習者間の質疑応答や学習者同士のインタラクティブなやりとりをしながら確認していった。また、毎回の授業では受講した感想を200字程度で書くという課題を課しTeams上で提出してもらい、次の授業の冒頭でその場で教員が受講生の感想の添削を施すフィードバックとともに前回の復習をし、その日の授業に入っていくという構成にした。

なお、2回目の授業で行われた特別講義Ⅰはハイブリッド型（対面＋ZOOM）で、13回目の授業の特別講義Ⅱはオンライン（Teams）で実施された。12回目の授業は韓国と繋いで交流授業が行われたため、受講生は講義室で学習したがオンライン（ZOOM）による交流となった。16回目から19回目の授業は一部の受講生が体調不良のためハイブリッド型（対面＋Teams）で実施され、内容の確認のため授業の録画もされた。ハイブリッド型で実施された授業においては、オンライン学習ツールとして受講生が学内のみの場合はMicrosoft Teamsが、学外の学生も受講する場合はZOOMが使用された。

授業では、通常の日語の作文ならびに発表能力を向上させる授業とは別に、特別講義として授業担当教員以外の日本語教育と経営学が専門の教員2名（米国・東京からの遠隔参加）が自身の専門に関する講義を行った。テーマは、「グローバル時代を生き抜くための人間力」、「日本社会におけるキャリアプラン」であった。その際は、受講生の他に教職員や協定校の日本語専攻の学生も共に学ぶ機会が提供され、中国の協定校はクラス単位で参加した。

表4 上級日本語授業の内容

回	実施日	授業内容	回	実施日	授業内容
1	10.04	オリエンテーション「論理的な文章とは」	17	12.02	<ハイブリッド>語や文の名詞化
2	10.07	<ハイブリッド>特別講義I「グローバル時代を生きるために」	18	12.06	<ハイブリッド>首尾一貫した文
3	10.11	自己紹介I ペアワーク・共通点探し	19	12.09	<ハイブリッド>句読点の使い方 句読点以外の記号の使い方・原稿用紙
4	10.14	自己紹介II 個人発表・質疑応答	20	12.13	レポートにおける引用
5	10.18	より良い自己紹介・発表の仕方、自己紹介動画の自己・他者評価	21	12.16	段落の構成(段落内の構成・段落相互・文章全体の構成)
6	10.21	敬語を使った自己紹介の方法	22	★12.20	<対面>日本人学生とのピア・ラーニング活動II 自己紹介、今年と来年の漢字、ピア・レスポンス活動、自分の立場の主張・反論
7	10.25	学習者の作文修正練習	23	12.23	レポート「最近頭に来たこと」
8	10.28	様々な自己紹介(性格・長所と短所)	24	01.06	仕組みの説明I 意見文の書き方
9	11.04	話し言葉と書き言葉	25	01.10	仕組みの説明「多文化共生社会」 学習者同士のピア・レスポンス活動
10	11.08	書き言葉らしさ(軟らかい・硬い書き言葉)	26	01.17	分類「日本語の出自」
11	11.11	発表/論文・レポートの文体I	27	01.20	定義の3原則 学習者同士のピア・レスポンス活動
12	★11.15	<ZOOM>日本人学生とのピア・ラーニング活動I 自己紹介・お勧めの旅行地	28	★01.24	<対面>日本人学生とのピア・ラーニング活動III 最終発表「自分の主張」
13	11.16	<Teams>特別講義II「ポストコロナ時代の就職活動最前線」	29	01.27	定義「SDGs」 レポートの資料の利用I 資料の探し方
14	11.22	発表/論文・レポートの文体II(練習)	30	01.31	レポートの資料の利用II 調査の仕方 レポート作成方法
15	11.25	自動詞や受身形を使った文	31	02.03	レポート・アンケート提出
16	11.29	<ハイブリッド>助詞「は」と「が」の使い分け			

★印：交流授業実施日

*2回目の授業の特別講義Iはハイブリッド型で、13回目の授業の特別講義IIはオンライン(Teams)で実施。12回目の授業は韓国と繋いで交流授業が行われたため、受講生は講義室で学習したがオンライン(ZOOM)による交流。16回目～19回目の授業は受講生が体調不良のため、ハイブリッド型(対面+Teams)で実施。

3. 交流授業の概要および実践状況

今回実施された交流授業は、4名の留学生対象の上級日本語授業内で①2022年11月15日、②2022年12月20日、③2023年1月24日の3度にわたり行われた。3回の交流授業において①は留学生4名と韓国の協定校の日本語専攻の学生18名と海外の同世代の学生との交流を希望する教育学部の日本人学生6名がZOOMを介して60分間交流した。そして、②③は留学生4名と留学生と交流を希望する教育学部と理工学部の日本人学生4名が90分間対面の交流を行った³⁾。

なお、韓国の協定校とは2011年からオンラインで継続的に様々な形態で交流授業を実施してきている(大塚, 2015, 2018)。今回の交流授業①においては、海外の同年代の日本語学習者同士の日本語を介しての交流も気づきや学びが多いが、コロナ禍以降接触の機会が減少した目標言語のネイティブ話者である日本人学生との日本語での交流も協定校側が希望しており、3者による交流授業となった。

また、交流授業①では、学内にいる留学生と日本人学生も直接対面で接触せずZOOMを通しての交流となったが、交流授業②③においては留学生が学習する講義室に日本人学生も参加する形で対面での交流が行われた。

3.1. 交流授業の目標

今回の交流授業が行われる前提としては、以下の2点が挙げられる。1点目として、本交流授業は、留学生対象の上級日本語の授業内で行われる学習活動であること、2点目として、参加する学生にとっては、異文化理解ならびに海外の同年代の学生と日本語によるコミュニケーションを通して異文化に触れ視野を広げる機会であることである。

そこで、3回にわたる交流授業の目標としては、以下の2点を掲げ主体性を持って交流できる構成とした。1点目としては、学習者が協働しながら互いに主体性を持って学んでいくピア・ラーニング活動を通して自身の考え、意見を論理的に述べることができること、2点目としては、海外の同世代の学生と日本語によるインタラクティブな交流を通して異文化理解ならびにグローバルな視点の獲得を目指すことである。また、本授業のファシリテーターである教員としては、交流授業はキャンパスの国際化を促すための交流の一つの機会であり、その授業を通して学生同士が知り合うことで交流の輪が広がり、継続的な友人関係に発展することを期待する一面もあった。

3.2. 交流授業の内容

今回実施された交流授業の内容は、表5のとおりである（表5参照）。第1回目の交流授業では、留学生4名は大学の講義室に集まり自身のパソコンやモバイル端末で、日本人学生6名は自宅や大学で個々に、韓国の協定校の18名の日本語専攻の学生は大学の講義室に集合し自身のパソコンやモバイル端末でZOOMに接続した上で授業が60分程度行われた。授業では、高知大学の留学生と日本人学生が書いた自己紹介文を提示しながら一言ずつ自己紹介が行われ、その後、アイスブレイクとしてブレイクアウトルームで日韓混合の7つのグループに分かれて自己紹介を兼ねたグループメンバーの共通点探しが7分程度行われた。そして、メインルームに戻り各グループの共通点をチャットに記入することで共有してもらい、参加した学生が対等に関われるよう雰囲気づくりをした。次に、共通点探しと同様のグループにブレイクアウトルームで分かれ、「自分の国のおすすめの旅行地」をテーマに15分程度の話し合いが行われた。具体的には、各自がオンライン上のワークシートに写真とともに掲載したおすすめの旅行地をそれを選んだ理由とともに説明した。グループメンバーが説明し終わった後コメントや質問をしあい、一番印象に残った旅行地を各グループで話し合って選択した。そして、メインルームで参加者全員に選ばれた旅行地をすすめた学生が発表することで共有した。最後に、各グループの選ばれた旅行地の発表を聞き、Forms上で相互評価を行い、一番印象に残った旅行地ならびに一番発表が良かったグループを投票で決定し、教員が講評をした。

第2回目の交流授業では、留学生4名が学習している講義室に日本人学生4名も参加し対面での交流が90分間行われた。授業は、第1回目に参加した日本人学生以外に3名の学生が参加したため、まず留学生と日本人学生が一人ずつ「最近ハマっていること」を含めて一言ずつ自己紹介をした。その後、グループ活動として4名ずつ2つのグループに分かれ、アイスブレイクとして自己紹介を兼ねた共通点探しが7分程度行われ、各グループでどのような共通点があったかをクラス全体で共有した。次に、自分が考える「今年の漢字・来年の漢字」をワークシートに記入し、その漢字を選んだ理由とともに今年の総括と来年の抱負を述べあい、それに対するコメントや質問をしあう活動が7分程度行われた。そして、教員による作文執筆時の留意点とピア・ラーニング活動の意義と方法に関する説明を聞いた後、各グループの4名のメンバーをペアに分け留学生が書いた「自己紹介文」に対して日本人

表5 交流授業の内容

回	授業内容	参加学生 ⁴⁾	交流場所
第1回目： 2022年11 月15日 (60分間)	① 高知大学の学生の自己紹介 ② グループ活動①：共通点探し（自己紹介）(7分間) ③ グループ活動②：テーマトーク「自分の国のおすす めの旅行地」(15分間) ④ クラスで共有：各グループで一番印象に残った旅行 地発表 ⑤ 相互評価：Forms上で投票（一番印象に残った旅行 地・一番発表が良かったグループ）	日本側：留学生4名、 日本人学生6名（教育 学部） 韓国側：日本語専攻 学生18名（うち中国 人留学生1名含む）	ZOOM (オンライン)
第2回目： 2022年12 月20日 (90分間)	① 自己紹介「最近ほまっていること」 ② グループ活動①：共通点探し（7分間） ③ グループ活動②：今年の漢字・来年の漢字（7分間） ④ 作文執筆時の留意点の説明・ピア・ラーニング活動 についての説明 ⑤ ペア活動①：自己紹介の作文に対するピア・レスポ ンス活動（15分間） ⑥ ペア活動②：意見文執筆の前段階のピア・ラーニン グ活動「最近頭にきたこと」の話し合い（15分間）	留学生4名、日本人学 生4名（教育学部3名、 理工学部1名）	講義室 (対面)
第3回目： 2023年1月 24日 (90分間)	① 自己紹介「今、一番行きたいところ」 ② ペア活動：意見文発表の予行練習・コメント（15分間） ③ 意見文発表（10分間）・質疑応答（5分間） ④ 相互評価：投票（一番印象に残ったテーマ・一番発 表が良かった学生）	留学生4名、日本人学 生4名（教育学部3名、 理工学部1名）	講義室 (対面)

学生が主に内容に関するコメントと改善点を指摘するピア・レスポンス活動を15分程度行った。留学生は、日本人学生のコメントを検討するとともに指摘された箇所に関しての疑問点を質問し、宿題として「自己紹介文」を修正するという課題が課された。さらに、4名のメンバーの中でペアを入れ替え、留学生が意見文を書く前の準備段階として「最近頭にきたこと」に関する意見を互いに述べ、それに対する反論をしあうというピア・ラーニング活動が15分程度行われ、冬休みの課題としてその話し合いを基に意見文を執筆することとした。

第3回目の交流授業では、第2回目と同様留学生4名が学習している講義室で4名の日本人学生と対面で交流が行われた。授業は、第2回目の交流で日本人学生とともに話し合った「最近頭にきたこと」をベースに留学生が執筆した意見文の発表を軸に据えた。まず、新たに参加したメンバーも2名いたため、留学生と日本人学生が「今、一番行きたいこと」を含めて自己紹介を行った。次に、留学生と日本人学生がペアを組み、意見文発表の予行練習

として留学生が準備してきた発表内容を日本人学生に聞いてもらい、より良い発表にするためのコメントや改善点を指摘してもらうピア・レスポンス活動を15分程度行い発表内容について吟味しあった。留学生の意見文の発表は10分間程度行われ、それに対してペアを組んだ日本人学生が最初に質問をし、その後自由に質問をする時間を5分程度取った。発表を聞いている学生は「発表評価シート」に自分の評価も含めて相互に評価をしあい、最後に一番印象に残った意見と一番発表が良かった学生を投票した後、教員がフィードバックをした。

3.3. 交流授業①の設計および実装

交流授業①では、日本と韓国の講義室をZOOMで繋ぎ、日本人学生は講義室に収容しきれないため、個別にZOOMに参加するという形で授業を設計した。日本の講義室には大型モニターが設置されておりパソコンを接続し、韓国の講義室にはスクリーンがありプロジェクターでZOOMの画面を映し出した。そして、互いの講義室の臨場感を伝えるために、webカメラを外付けし授業を受講する学生の姿を映し出すようにした(図1・2参照)。講義室の学生がブレイクアウトルームで話し合う際には、各自がイヤフォンを装着しハウリングが起こらず一斉に話しても集中できるようにした。オンライン上で参加する日本人学生には、クラスの雰囲気づくりと効率的な協働学習をするため、カメラをオンにして授業に参加することを推奨した(図3参照)。さらに、協働学習で使用する自己紹介文やおすすめの旅行地のスライド、ワークシートはGoogle Driveを使用し、オンライン上で交流授業に参加する学生には閲覧と書き込みができるよう設定し、授業の補助手段として活用した(図4参照)。

なお、交流授業①ではオンライン学習ツールとしてZOOMを使用したのが、その理由としては、Teamsよりブレイクアウトルームがスムーズに作成できること、全世界的に普及されており使い慣れている学生がほとんどであることことに起因する。

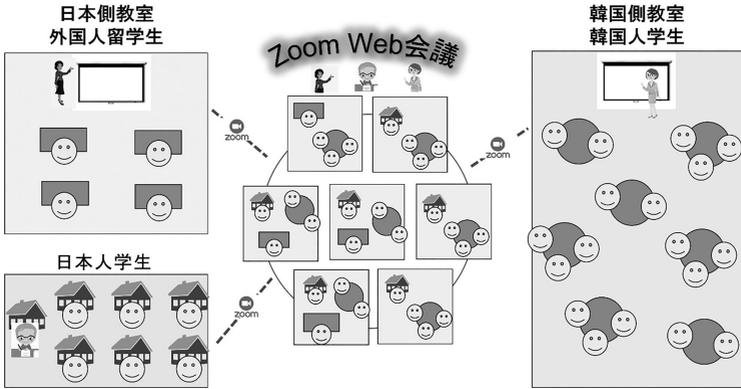


図1 交流授業概略図



図2 交流授業①における日本側の実装



図3 ZOOMを用いた共有画面



図4 Google Driveの画面



図5 交流授業③における実装

4. 交流授業の評価方法

今回行われた3回の交流授業では、授業終了後に留学生は授業の感想ならびに「交流授業アンケート」に回答しTeams上の「課題」に提出した。また、日本人学生に対しても各交流授業終了後「交流授業アンケート」として回答してもらった。アンケート項目は、「授業の満足度」、「交流活動の評価」、「ピア・ラーニング活動の評価」等を挙げた。感想や意見の記述以外の客観的な評価項目は、「十分」が5点、「かなり」が4点、「普通」が3点、「あまり」が2点、「不十分」が1点の5段階で評価してもらった。

5. 交流授業における参加学生の評価および感想

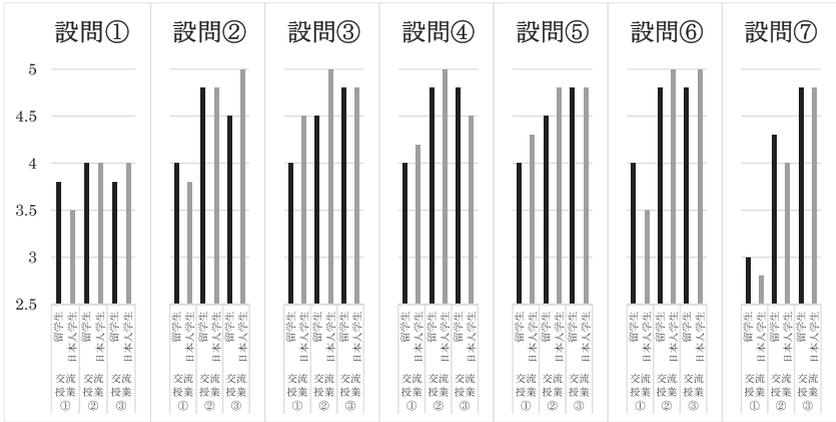
今回の交流授業に参加した留学生と日本人学生の「交流授業アンケート」より共通項目を抜粋しそれぞれの評価および感想を取り上げていく。

5.1. 交流授業における参加学生の評価

今回の交流授業全体を通じた参加した学生の評価は、5段階中平均で4.4（留学生の平均4.3、日本人学生の平均4.4）であり好評価を博し、オンラインによる遠隔交流（交流授業①）よりも対面での交流（交流授業②・③）のほうが評価が高かった（表6・グラフ1参照）。

表6 交流授業の評価

	調査項目	交流授業①		交流授業②		交流授業③		平均
		留学生	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生	日本人学生	
1	交流授業における日頃の勉強の成果の発揮	3.8	3.5	4	4.0	3.8	4.0	3.9
2	交流授業での積極的なやり取り	4.0	3.8	4.8	4.8	4.5	5.0	4.5
3	交流授業での相手の話に対する傾聴	4.0	4.5	4.5	5.0	4.8	4.8	4.6
4	交流授業での自分の意見の発信	4.0	4.2	4.8	5.0	4.8	4.5	4.6
5	交流授業における相手の文化的背景の理解	4.0	4.3	4.5	4.8	4.8	4.8	4.5
6	交流授業の満足度	4.0	3.5	4.8	5.0	4.8	5.0	4.5
7	交流授業を通じた異文化理解の深化	3.0	2.8	4.3	4.0	4.8	4.8	4.0
	平均	3.8	3.8	4.5	4.7	4.6	4.7	4.4



グラフ1 交流授業の評価

交流授業全体の満足度は、4.5であるが、遠隔で行われた交流授業①は3.8(留学生4.0、日本人学生3.5)であったのに対し、交流授業②・③は、4.9(留学生4.8、日本人学生5.0)であり有意差が生じた。また、他の項目もおしなべて遠隔で行われた交流授業①(留学生・日本人学生ともに平均3.8)より対面で行われた交流授業②(留学生の平均4.5、日本人学生の平均4.7)・③(留学生の平均4.6、日本人学生の平均4.7)のほうが高い評価になっていることが分かる。

特に、「積極的なやり取り」や「相手の話の傾聴」、「自分の意見の発信」のインタラクティブなコミュニケーションに関しては、遠隔で行われた交流授業①では、3.9(留学生4.0、日本人学生3.8)、4.3(留学生4.0、日本人学生4.5)、4.1(留学生4.0、日本人学生4.2)に対し、対面で行われた交流授業②では4.8(留学生4.8、日本人学生4.8)、4.8(留学生4.5、日本人学生5.0)、4.9(留学生4.8、日本人学生5.0)、交流授業③では4.7(留学生4.5、日本人学生5.0)、4.8(留学生4.8、日本人学生4.8)、4.7(留学生4.8、日本人学生4.5)であり、明確な相違が生じた。そのため、「交流授業を通じた異文化理解の深化」に関して交流授業①では2.9(留学生3.0、日本人学生2.8)であったのに対し、交流授業②では4.2(留学生4.3、日本人学生4.0)、交流授業③では4.8(留学生4.8、日本人学生4.8)という結果になり大きな差が生じた。

5.1.1. 交流授業①における参加学生の感想

交流授業①に関する参加学生の感想では、交流授業の学びとして、留学生は「様々な観光地を紹介し、お互いの異文化を理解することができた」、「以前よりプレゼンテーションをする力が上達したのを感じた。前の発表と本日のものを比較すると発言力・姿勢・表現のクオリティの差を段階的に自覚できた」、「日本の学生と韓国の学生と一緒に話し合い自分のことおよび様々な意見を交換したりできて目標を達成した。自分の日本語でのコミュニケーション能力が向上できる非常に良い機会となった」、「今までほとんど敬語を使わなかったのだが、授業で学んだ内容を対話段階で少しは使えるようになって嬉しかった」、「韓国の学生と日本語で交流を行い、中韓両国の文化と観光地をより深く知った。韓国の学生と初めて会ったが、気楽に楽しい時間を過ごすことができ、とても良い交流活動だった」と感想を述べており、異文化交流や異文化を理解することの楽しさや協働学習時に普段の学習の成果が発揮され自己を客観的に観察した上でコミュニケーション能力の向上に言及していた。

一方、日本人学生は、「韓国の学生の方々が意欲的であったため、こちらも初対面かつ遠隔という条件にもかかわらず活発な交流ができた。ブレイクアウトルームでは合計30分にも満たない時間であったが、授業終了の際はグループメンバーに対して親しみを強く感じた。相互理解や他言語コミュニケーションという点では、日本語を学習している学生の立場から、『いかに分かりやすく』『聞き取りやすく』を意識して、活動に取り組むことができた」、「新たに今回韓国をはじめたくさんの外国人学生と話すことができて、また少し自分の知見や外国の捉え方がより良いものになったと感じた」、「最後の発表でも色々な意見が聞けたし、話の中でも異文化交流できた」、「韓国の学生はすごく日本語が上手で、自分も外国語を頑張って勉強しようと思った」などの感想が挙がっており、協働学習による新たな知見やグローバルな視点の獲得、同世代の学生たちからの外国語学習に対する刺激、日本語ネイティブ話者としてのコミュニケーション上の気遣いがうかがえた。

一方、交流授業の改善点としては、留学生から「大人数で一部屋でオンラインで繋ぐのは初めてだったので、重なった話し声の区別が難しかった」、「マイクに問題がある学生が何人かいた。全員一つの狭いクラスに集まって、一緒にオンライン学生交流活動を行ったので、何を言っているのかよく聞き取れず、時間も足りなかった」、「いろいろな騒音のせいで発表者の声がよく聞

こえず、インターネットの状況が良くなかった」、「会話中、ヘッドセットは問題なく使えたが、相手側から雑音が時折入ったので、誰が何を話しているのか分かりにくかった。また、初めての相手なので、自己紹介とアイスブレイクはより長い時間配分にすればよい」との意見が挙がっており、インターネット環境や設備により授業へのアクセスが左右されるとともに、一クラスに多人数の学生が一度に話すという韓国側の教室の環境が協働学習に支障をきたしたことが、協働学習の時間が不足していたことが分かった。日本人学生も「同じ教室にいる学生の声ばかり聞こえて同じ班の方の声が聞こえないことが多々あった」、「通信状態が悪くなると相手の言いたいことと実際に自分が聞き取れたことが全く違っていた」、「マイクで話せなかったり、声が遠かったりする」、「韓国の旅行地や料理などは、オンラインということもあり、聞き取りにくかった」、「観光地の場所を聞かれたとき、詳しい地名を伝えるのが難しかった」、「聞き返すことへのためらいがあった」、「ブレイクアウトルームの時間は限られているので、その時間内に絶対話し合いを終えることが難しい」との意見があり、インターネットや教室の環境によりスムーズな交流が困難であったことや海外の学生に対する固有名詞の説明の難しさ、ブレイクアウトルームでの話し合いの余裕のなさが挙げられていた。

その他、「限られた時間だったので大変満足とまではいかなかったが、久しぶりに新たな方々と交流できて新鮮な気持ちになった」、「異文化交流という観点では、如何せん短時間であったため、もう少し活動時間を要すると思う」、「同年代のアジアの学生であったからなのか、趣味が似ている気がした。日本語を学ぶ学生の皆さんが話し合いの時にしっかりメモを取りながら聞くようにしていたのをみた。しっかり自分の力を伸ばそうとする姿勢がすごいと思うと同時に、世界にはお互いの文化・価値を敬い知ろうとする人がたくさんいることがわかった」という日本人学生の感想があった。

5.1.2. 交流授業②における参加学生の感想

交流授業②に関する学びの感想として留学生から「本日のピア・ラーニング活動のおかげで視野が広がり、論理的に物事を考察できるようになった」、「日本人学生との相互交流は普段あまりない機会だったのでとてもよかった。日本人学生からいろいろな話が聞け、自分のことと合わせて沢山の意見が出て盛り上がったので上手にコミュニケーションが取れるようになった。意見の言い方に少し違いが見受けられたことが面白く興味深かった」、「過去に私

が書いた自己紹介文は、今の私が見るに粗雑で直す部分が多い不十分な文章だった。授業で文章を書く方法を学んだおかげで日本人学生が説明してくれる内容がよく理解できた。私が日本人と対話をスムーズに続けられるという事実自信がついた。今後も一生懸命勉強しなければならないと思わせるきっかけになった授業だった、「グループワークでの話し合いを通し、互いに学び合い異文化への理解が深められた。非常に有意義な交流活動であり、今後もこのような交流授業に参加したい」という感想が挙げられており、日本人学生との交流により視野の広がりや異文化理解の深化、日頃の学習の成果の確認が促されていることが分かった。

日本人学生の感想としては、「留学生たちと様々なジャンルの会話をすることができた。また、文化も共有することができた」、「本国での生活に誇りを持ちつつ他の国についても知りたいという意欲を留学生から感じる事ができて私もそうなりたと思ったし、ますます外国と日本の価値観の違いをお互いを尊重しつつ知っていきたいと思った」、「留学生との交流がメインの授業だったので、話をたくさんしたことで留学生の国のルールや留学生の趣味など色々なことが知れて楽しかった」、「普段留学生と関わる機会が無いので留学生がどのように外国語の勉強をしているのか知ることができなかったが、今回授業に参加して懸命に日本語の自己紹介文を考えている姿を見て日本語習得に対する意欲や姿勢を見ることができ自分も頑張ろうという気持ちを持った」という学びがあり、留学生への共感や異文化理解の深まり、留学生との交流により内省を促す効果があったことがうかがえた。

交流授業の改善点としては、「もっといろいろと話したかったので交流の時間が不十分だった」、「共通点探しの時間が少しくつく、きちんと話し合いができなかった」という交流時間の短さに言及している留学生が2名いた。また、「自分自身の単語力不足や知っている言葉で文を作り発言する力が不十分であるため、流暢に発言できなかった」、「なかなかうまく話せずあまり発言できないときに、話しやすい雰囲気づくりをすることが不十分だった。日本人学生は日本語の単語について日本語で説明することの難しさがある」、「自分の聞き取り能力と語彙力不足のため、日本人学生が伝えたいことをうまく理解できない場合と自分のことを日本人学生に伝えられない場合があった」など自身の日本語力の不十分さのためインタラクティブなやり取りが円滑に行われず内省する留学生の姿が見て取れた。一方、日本人学生も「普段、日本語の使い方を説明することは無いので、どういう時にどのような表現を

するといった説明の難しさを学んだ」、「日本語の細かいニュアンスを知りたがっていた留学生がいたがうまく対応できなかったかわからない。日本語を日本語で説明しても伝わらないことが少しあったため、別言語でも単語レベルでもいいから説明するときにより分かりやすくしなければいけないと感じた」、「自己紹介文のアドバイスをする時に、助詞や敬語の適切な使い方や意味を教えるのが難しかった」という日本語の文法や表現を日本語で説明する困難さを語っており、普段何気なく使用している言葉を改めて見直す機会になったことがうかがえる。

その他、「実際に対面で留学生とコミュニケーションをとることができる機会が訪れてとてもうれしかった」、「今まで何回か留学生と交流する機会に参加させていただいてきたが、やはりオンラインより対面のほうが会話のテンポもお互いの距離感もちょうどよい」、「作文に関してはなぜ段落を分けるのかやなぜ一文字あけるのかなど何か指導する際に理由もわかりやすくつけてあげるほうがよいことを学んだ」、「留学生の姿を見て、自分も海外に行って語学を学びたいという気持ちが出てきた」という日本人学生の意見があり、オンラインより対面でのほうがコミュニケーションが取りやすいこと、日本語指導の難しさ、内省による自己啓発の芽生えが見られた。

5.1.3. 交流授業③における参加学生の感想

交流授業③に関する参加学生の学びとしては、留学生より「ピア・ラーニング活動を通じて、新たな知識を得たことで、興味関心が広がった。日本人学生はやさしい日本語で話し聞き手に理解しやすいようにいろいろ注意して話してくれたので、対面での交流がスムーズだった」、「日本人学生との交流は様々な話題でかなり盛り上がり、一層お互いのことが知り合えた。尋ねたい質問がある際、その質問が相手を不愉快にさせないようなものである限り、積極的に尋ねていくことは視野を広げることになる」、「ペアを組んだ日本人の友達から理解しにくい部分や説明がより必要な部分など多くのフィードバックをもらい、本当に役に立った。フィードバックされた内容を発表で全部言えるか心配だったが、意外と改善されたようで良かった」、「前に書いた意見文の発表を中心として、日本人学生と交流活動を行い、互いに理解を深め合い充実した時間を過ごした。非常に有意義な交流授業だと思うので、今後もこのような交流活動に積極的に参加していきたい」という意見が挙がり、協働学習を通して新たな知見を得るために積極的に質疑応答をしながら交流

が活発に繰り広げられ、その後の発表にもその成果が反映されていることが見受けられた。

日本人学生は「自国の価値観以外の価値観を知り、それぞれの価値観や意見を尊重しようと思つた」、「今回の授業では、留学生が日本に来て感じたことや経験から学んだことを知れたとともに、日本以外の食文化や生活について初めて留学生本人と一対一で会話し学ぶことができた」、「生れた国が違っても同じ意見を持っている方がいることを学んだ。また、意見文の内容によって留学生の人柄を感じることができた」、「留学生が大学のひとつひとつの学びを大切に、自分のものとして学び得る姿に感動し、私も大学での学びを熱心に学び取る姿勢を目指したいと考えることができた」との感想があり、同世代の他国の学生とともに学ぶ機会に恵まれ切磋琢磨しあいながら互いに自己を見つめなおすことで新たな価値観が創られている様子が見えた。

交流授業の改善点としては、留学生は自身の事前準備不足や語彙力不足で会話がスムーズに進まなかったり、時折うまく伝わらず説明が難しいことがあったりしたことを皆挙げていた。日本人学生も「熟語が伝わりにくく、慣用表現も難しいのかなと感じた。そのような言葉はできるだけ噛み砕いて説明するようにしたが、やさしい日本語はなんだろうかと考えさせられた」、「日本語を話して下さる中で、接続詞の間違いで内容の意味が変わるため、本当に伝えたいことを推測し理解しようとすることに苦労した」、「難しい日本語や方言は伝わらないので、日本語の選び方が難しかった」と感想を述べ、日本語でコミュニケーションを取る上で苦心しながらも多様なストラテジーを駆使している様子が見られた。また、「(発表で) ホワイトボードを利用する方がいらっしゃり、書いたものが見えない時もあった」、「(発表後の) 質疑応答が短く、活発でなかった」という発表の仕方や発表後の質疑応答での受け答えの質に関する意見があった。

その他、「正直、皆さんに会うまでは『留学生は怖い』という印象を勝手ながら持っていた。しかし、実際に会ってみるととてもよく話しかけてくれ、話の内容や考えることも日本の学生とそんなに変わらず、とても勉強熱心な方ばかりだなという印象を持つようになった」、「日本語を学んでいる留学生と関わって、自分の言語学習への意欲を高めたい」、「初めて留学生の友達できて嬉しかった」という日本人学生の意見があり、留学生と直接接することでの価値観の好転、対面で直接交流することにより友人関係に発展してい

るさまが見て取れた。

5.2. 交流授業における協働学習の効率性の評価

今回の3回にわたる交流授業では、ペアやグループワークによる協働学習を行い、互いの意見を交換しあう時間をできるだけ設定することで交流を深めていった。交流授業における協働学習の効率性の評価として、グループワークの適切な人数と活動時間について見ていく。

5.2.1. 交流授業におけるグループワークの適切な人数

表7は「交流授業におけるグループワークの適切な人数」を回答してもらったものである。交流授業①では、日韓混在の7グループに分かれ、グループワークの人数は3名から4名であった。交流授業②では最初4名でグループワークが行われ、その後4名のグループを2つに分けペアワークが行われた。交流授業③では、発表前の予行練習を効率的に行うためにペアワークが実施された。

表7 交流授業におけるグループワークの適切な人数 (名)

	交流授業①		交流授業②		交流授業③	
	留学生	日本人学生	留学生	日本人学生	留学生	日本人学生
人数	4.0	3.8	4.0	4.0	2.3	2.5
平均	3.9		4.0		2.4	

表7から分かる通り、交流授業①は3.9名（留学生4.0名、日本人学生3.8名）、交流授業②は4.0名（留学生4.0名、日本人学生4.0名）、交流授業③は2.4名（留学生2.3名、日本人学生2.5名）であり、それぞれ実施された人数に対し多少前後はあるが適当であったことが分かる（表7参照）。交流授業①での適切な人数の意見としては、「ブレイクアウトルームでの話し合いの人数は5人までで、6人を超えると効率的でなくなってしまうと思われる。なぜなら、建設的な意見のやり取りができなくなってしまうからである」、「準備する時間が長い活動であれば5人前後の人数でよいが、準備時間、話し合いの時間が短い活動だと、3～4人がちょうどよい」、「(3名が)各自が適度に話し、適度に聞くことができる。活動する上でバランスがよい」という意見が挙げられた。

交流授業②では、「会話を続けさせることができ、一人一人十分に話せる」、「ペア学習も十分よかったが、様々な意見を取り入れるとすると4人が妥当だと感じた」、「一人一人の意見の取りこぼしが無くて適切な人数だと思った」、「日本人学生2人、留学生2人であれば日本人学生がそれぞれ1対1で留学生をサポートすることもでき、また、留学生から日本語について質問で答えづらいことがあっても、もう1人の日本人学生に相談することで解決することができる」、「本日のように各グループに4人メンバーがいればペア活動をするときにもメリットがある」という回答の理由が挙げられていた。

交流授業③では、「短い時間の中で、相手とお互いにいろいろなことを話合うことができるからである」、「2人という少数で、一つのことに深く掘り下げて会話ができた」、「今回は意見文の練習をしつつ添削を行ったので、2人でペアワークを行ったほうが話の方向を一つにまとめやすくなる」、「一対一で話すほうが意見を言いやすかったり聞きやすかったりした」という意見があり、ピア・レスポンス活動を行うにあたり、一対一での活動が効果的であったことが分かった。

5.2.2. 交流授業における協働学習の適切な活動時間

表8から表10は、交流授業①②③における協働学習の適切な活動時間の平均値である。交流授業①では、60分間の授業内で協働学習として「アイスブレイク」を7分、「テーマトーク」を15分程度実施した。その結果、日本人学生は「アイスブレイク」が8.0分、「テーマトーク」が15.3分でおおむね適当な時間配分だと考えていたが、留学生は「アイスブレイク」が13.0分、「テーマトーク」が16.3分でより多くの時間を設定することを希望していた（表8参照）。特に、「アイスブレイク」は設定した時間帯のほぼ2倍の時間を必要としていた。理由としては、「私のグループは全てのブレイクアウトルームでの話し合いの時間が足りなかったのもう少し時間が長くなればより効率的になると思う。ブレイクアウトルームでの雰囲気徐々に盛り上がり楽しくなったため、グループメンバーの理解につながった」、「お互いに親しくなる時間もなかったのもう本当に共通点だけを見つけて終わった」、「アイスブレイクは他のテーマより長い話し合いの時間が必要だ」、「旅行地紹介の時間は人数にもよるが、私のグループでは最後の人に回るまで時間がかかってしまったし、最後の発表者決めも中途半端だったので20分を提案した」のようにより多くの時間を要するという意見が挙がっていた。

表8 交流授業①における協働学習の適切な活動時間 (分)

	留学生	日本人学生	平均
アイスブレイク (7分)	13.0	8.0	10.5
テーマトーク (15分)	16.3	15.3	15.8

交流授業②では、90分間の授業内で協働学習として「アイスブレイク」を7分、「今年・来年の漢字」の紹介を7分、自己紹介文の「ピア・レスポンス活動」を15分、「テーマトーク」を15分程度行った。その結果、「アイスブレイク」は平均で8.7分（留学生8.5分、日本人学生8.8分）、「今年・来年の漢字」は8.0分（留学生8.5分、日本人学生7.5分）、「ピア・レスポンス活動」は15.7分（留学生15.0分、日本人学生16.3分）、「テーマトーク」は16.3分（留学生18.8分、日本人学生13.8分）となり、留学生の「ピア・レスポンス活動」と日本人学生の「テーマトーク」の希望する活動時間以外は、若干多くの活動時間を要することが分かった(表9参照)。その理由としては、「アイスブレイクはグループのメンバーが初めて会い、お互いについてもっと知りたいと考えているため、数分追加する必要がある」、「アイスブレイクの共通点探しは、思ったよりも共通点になり得るものが出づらかったので、もう少し話し合う時間を延ばしても良い」、「今年・来年の漢字は、時間が足りず漢字を選んだ理由が明確に言えなかった」、「ピア・レスポンス活動は割と長めの自己紹介文だったので、精読してコメントするには15分より20分が適当だ」、「テーマトークは反論、自分の意見の発言という意見文の執筆に必要な要素なので、もう5分ほど時間を割くのが良い」といった意見があった。また、「ゆっくり話し合いの時間を作ったほうが良い」、「オンラインで会話するのではなく、直接顔を合わせて会話したためか、前よりも速い流れで会話することができた」という意見も挙がった。

表9 交流授業②における協働学習の適切な活動時間 (分)

	留学生	日本人学生	平均
アイスブレイク (7分)	8.5	8.8	8.7
今年・来年の漢字 (7分)	8.5	7.5	8.0
ピア・レスポンス活動 (15分)	15.0	16.3	15.7
テーマトーク (15分)	18.8	13.8	16.3

交流授業③では、90分間の授業内で協働学習として「ピア・レスポンス活動」を15分、「発表」を10分、「質疑応答」を5分行った。その結果、留学生の希望する「ピア・レスポンス活動」時間の平均が16.3分、日本人学生の「質疑応答」の希望時間の平均が7.5分とやや長めであったが、その他の活動時間の配分は適当との回答であった（表10参照）。その理由としては、「練習も15分で発表と質疑応答の時間も15分なので、練習した通り発表ができて良かった」、「留学生にとっても、話すスピード、話す内容的に発表時間は10分でちょうど良かった」のように適切な時間配分だったという意見が多数を占めた。一方、「予行練習の時間は少し長くしたい。なぜかという、発表までに自分で十分な準備をしておいても、日本人学生に改善点およびアドバイスをもらうことが非常に重要だ」、「せっかく頑張って準備をして発表するのならば、その内容について全員がきちんと興味を持ち、質疑応答で深掘りすべきだ」という意見があった。

表10 交流授業③における協働学習の適切な活動時間 (分)

	留学生	日本人学生	平均
ピア・レスポンス活動(15分)	16.3	15.0	15.7
発表(10分)	10.0	10.0	10.0
質疑応答(5分)	5.0	7.5	6.3

6. 交流授業における考察

今回の交流授業は、キャンパスの国際化の一環として留学生対象の上級日本語授業内でピア・ラーニング活動を中心に実施された。そこで、留学生と日本人学生がピア・ラーニング活動をすることで、いかに主体的に授業に参画できるかという観点から考察をしていく。

6.1. 交流授業におけるピア・ラーニング活動に関する考察

今回の3回にわたる交流授業は、仲間と協力して学ぶピア・ラーニング(peer learning)活動を軸に据えて実施した。ピア・ラーニング活動は、仲間とともに課題に取り組み、その過程を共有することで、リソースが増えるというメリットがある。また、お互いに話し合うことにより理解が深まり、自分を客観的に眺めることができる。これは、自分の行動や考え方を別の立場から見て認識する活動である「メタ認知活動」であり、それが新しい発

見や自己成長に繋がると言える。実際、ピア・ラーニング活動として「自己紹介を兼ねた共通点探し」や「テーマを決めた話し合い」、「作文や発表の内容に関するア・レスポンス」が行われたが、それらの活動を通して参加学生それぞれが異文化を学び合いグローバルな視点を獲得し、自分を客観的に見つめなおす内省が促され自己成長に繋がる学びがあったことがうかがえた。

つまり、今回の交流授業では、協働学習を通して末松他(2019)の言う「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流(meaningful interaction)を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験」が実践されたと言える。そして、「学習者が互いの物事へのアプローチ(考察・行動力)やコミュニケーションスタイルから学び合う」ことができた。さらに、「知的交流の意義を振り返るメタ認知活動」により参加学生それぞれが「視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる」べく意味ある交流ができたことが見受けられた。

その一方で、今回の交流授業はオンラインで行われた交流授業①より交流授業②③のほうが全体的に評価が高かった。これは、オンラインと対面の相違によるとともに交流時間や内容が影響したと考えられる。オンラインでは韓国の協定校と繋いで行われたため、韓国と日本の授業時間の重なる時間帯に設定し交流時間は全体で60分間であり、協働学習の時間もアイスブレイクが7分、テーマに関する話し合いが15分であった。そのため、グループワークの人数はおおむね適当であったものの「協働学習の時間が短く十分な話し合いができなかった」という不満が残る結果となった。また、交流内容も「自己紹介を兼ねた共通点探し」と「おすすめの旅行地」の紹介に留まり、「知らない土地の知らない観光地を知ることができて、世界には素敵なおとこがたくさんあると分かった」という意見がある一方、「おすすめの観光地からはその国ならではの文化や文化の違いがあまり感じられなかった」という異文化理解の深化が不十分であったという声もあった。このように、交流授業①は、一度のオンラインによる交流では他文化についての理解の深化までには至らなかったが、交流授業②③は、対面での協働学習の時間を確保することでより深い対話が可能となり、それにより異文化理解の深化に繋がったことが見受けられた。また、協働学習の時間配分については、全体を通して概ね適当との回答であったが、初対面の際のアイスブレイクの時間を多少長めに取ることで、参加学生の緊張をほぐすとともにメイン活動に向けてのグループの

雰囲気づくりをすることの重要性が参加学生の意見からうかがえた。

さらに、オンラインでの双方向のコミュニケーションに関しては、「周囲の騒音が気になり協働学習に集中できなかった」という声が日本側の参加者全員から挙がった。これは、日本側は教室に集まった対面での参加学生が4名だったのに対し、韓国側は18名であったため、学生間の距離も近く他のグループの学生の声が雑音として入ってしまったためである。グループワークを実施する場合、対面とオンラインの学生が混在したグループを組む際は音声の反響に十分な留意が必要であることが分かった。また、アプリや機器の状態により音声が入らず交流時間が少なくなった日本人学生が2名いたが、それにより参加度や満足度に影響が及んでいた。遠隔による交流授業の場合、アプリや機器の使用法、インターネット環境を事前に確認するとともに、対面の学習者間の距離やヘッドセットの装着などの工夫により円滑なコミュニケーションが取れるよう入念な準備が必要となるであろう。

6.2. キャンパスの国際化を促進すべく交流授業への参加を促す方策

今回の3回の交流授業を通して参加できた日本人学生は1名のみであり、コロナ禍であったため体調不良で急遽参加できなくなった学生もいたが、毎回新たなメンバーが加わり交流が行われることになった。参加した日本人学生のアンケート調査では協働学習を通じて様々な異文化に関する学びがあり、主体的に交流を進めていっている様子が見え、一方、継続的な参加率は決して高いとは言えなかった。そこで、キャンパスの国際化を促進すべく学生の交流授業への参加を促すためにはどのように働きかければ良いのか交流授業に参加した日本人学生にフォローアップインタビューを実施した。

今回参加した日本人学生はすべて教育学部と教職大学院の院生である。今回のインタビューの主目的は以下の通りである。教員になると多様な価値観が求められる。それゆえ、学生時代に様々な国の学生と交流することは大変価値がある（これについては参加者から同意を得た）。それにも拘わらず交流授業への参加者が少ないが、「どうすれば参加者が増えるか」について意見を聞いた。

院生1（現職教員）：今の傾向として、個を重んじるあまり、皆、権利ばかり要求する。一方で、興味のないこと、面倒くさいことには、一切参加しようとしな。一回り昔の自分らは「義理」を重んじるので、お世話になっている方に誘われたらNOとはいえない（実は今回の参加理由だそう。2

回目以降の交流授業に参加しなかったのは単なる情報漏れとのこと。

実際は、参加すれば必ず何か得るものがあるはずである。壁を取り除くために、交流授業に関連する授業を必修化すればどうか？ 少なくとも、1・2回、強制的にでも参加させることによりその有意性を実感することが大切ではないか。

学生A：言い方は悪いが「エサでつる」。学生が参加する（仕方なしではあるが）メリットを明確化+特典をつける。たとえば、パーティ形式の交流、ゲーム等の遊びの要素も盛り込んだりして興味を引くとか。参加しさえすれば、交流授業の面白さがわかるであろうから。ただしこのやり方は本意ではない……。

院生2（現職教員）：教員採用試験の面接のときに、（評価が高いとされる）ボランティア活動などしていない学生でも、このような授業に積極的に参加したということは、社交性や積極性などポジティブな印象を与えるので有益なのでは……、ということをアピールする。

学生B：教育学部においては、（4年以外では）授業カリキュラムがかなり詰まっていて、なかなか交流授業に参加する時間的余裕がない。4年次のオプションという感覚。でも4年次では、空いている時間帯にバイトを入れている現状。

学生C：「英語が余り上手くしゃべれないから自分なんて交流授業に参加する資格はない（もしくは恥ずかしい）」と勝手にハードルを上げている人が多いと思う。

学生D：インタビューに参加できなかった学生からのメール（直接添付）

まず、「教員になると多様な価値観が求められる」ということを教員を目指す学生たちが自覚していない、知らないのだと考える。仮にそのことを知っていたとしても、そのためにどのようなことに取り組みばいいのか分からない、知ろうとしないのだと思う。

私がこの交流授業に参加したのも、「多様な価値観を育みたいため」ではなく、ただの好奇心、興味であったのが本音だ。でも、実際に留学生の方たちと交流してみると思っていた以上に日本語が上手で、自分の考え、意志をはっきりと持っていて、私と1つ2つしか年齢が変わらないのに、勉学に対してとても熱心に励まれている姿を見て感化され、私もより一層真剣に勉学に励もうと背中を押された。また、留学生の方たちのプレゼンを聞いて、普段私たちが生活していて無意識にしていた行動、考え方に対し

て、日本人と留学生の方たちの母国の人たちとの違いを感じたり、驚いたり不思議に思ったりしていたことを初めて知ることができた。

この交流授業に参加する前、英語が流暢に話せないことに対してすごく心配していた。けれど、様々な価値観や考え方、「日本人は、世界はこれからどうあるべきか」について外国の方からの生の意見を聞くことが出来、参加して本当によかったと思っている。

「私は英語やグローバルに興味はないから関係ない」、「英語が得意ではないしわかりやすい日本語を話すのも難しいから参加しない」という考えは一旦捨てて、好奇心で動いてみるのもいい選択肢であると思った。「交流授業は英語は必要ない」、「色々な国の同世代の方たちの考えが聞けて楽しい」、「交流授業は勉学にとっても熱心に励んでいる留学生の方たちをみて、自分も頑張ろうと思えるきっかけになる」ということをそのまま学生に伝えてみることで、参加者が増えるのではないかと考えた。

交流授業はすごく楽しかったし勉強になったし、私も留学生の方たちに負けないようにより勉学に励もうと思われ、私にとってすごく有意義な機会になった。また参加したい。

現在、高知大学教育学部のいくつかの授業が四国の5つの大学の教育学部と連携して共同で開催されようとしている。それは、教員の人材不足を補うという効果もあるが、学生が大学の枠を超えて交流できるという利点がある。この流れは、いずれ全国各地に広がるであろうが、さらに長期的なスパンで考えると、日本を超えて、韓国などとのオンラインによる共同授業が存在するということが、教職に就く者がグローバルな視点や実践力を持つ上でも望ましい。今回の韓国の協定校との交流はそのための実験的な試みといえるのではないか。

7. まとめと今後の課題

今回の交流授業は、ピア・ラーニング活動を中心とした授業設計を行い、参加学生が分け隔てなくインタラクティブなコミュニケーションを図ることができるよう試みた。今回の交流授業を通して留学生の評価の平均は5段階中4.3で、日本人学生の評価の平均は4.4で高評価を博し、オンラインによる遠隔交流よりも対面での交流のほうが評価が高かった。海外の同世代の学生とのピア・ラーニング活動を主軸に据えた授業設計によるクラスの雰囲気づく

りや話し合い・発表を通じた異文化理解の視点の獲得、新たな価値観の創造等が利点として挙げられた。協定校の学生に対しては高知大学の学生との交流を体験してもらうことにより、高知大学への留学を促す効果があり、高知大学の学生にとっても協定校の学生と交流することでグローバルな視点を獲得することに役立った。さらに、日本人学生も授業に参加し、学習指導のチューターとしての役割を果たすとともに異文化を理解する機会となった。交流授業では、受講生の授業を受ける際のモチベーションが通常時より高まり、主体的に授業に取り組む姿勢が見られた。

一方、交流授業に参加した学生は、互いに楽しく交流しながらグローバルな視野や新たな価値観の形成が可能であるが、日本人学生の継続的な参加が望めないという問題が生じた。それに関しては、日本人学生のインタビュー調査からも明らかになったが、授業の一環としての参加や正課の授業における参加点をインセンティブとして付与する等の方策を考える必要性を感じる。

今後もキャンパスの国際化を促すためにも「国際共修」を授業の中に取り入れ、多様な交流授業のアプローチ方法を考案していきたい。

附記

本研究は、令和2-4年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号20K00886「国際共修による学習者主体の遠隔ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究」（研究代表者：大塚薫）の助成を受けて実施された研究である。

注

- 1) 高知大学HP「国際交流」データ集「交換留学派遣学生数」2022年5月1日現在による。https://www.kochi-u.ac.jp/_files/00171397/haken202205.pdf
- 2) グローバル教育支援センター主催の国際交流セミナー・イベントとしては、協定校間特別セミナーとして2020年から高知大学と協定校の教員が講師を務め「異文化理解」、「ビジネスマナー」、「雑談力」、「論理的な話し方」、「ビジネスコミュニケーション」、「異文化コミュニケーション」等のテーマで協定校を繋いで留学生・日本人学生に周知し参加を促しているが、参加する日本人学生は一行に留まっている。また、「アジアの文化を語ろう」という異文化理解・異文化間交流イベントを2021年に「アジアのお正月」、2022年に「アジアの食文化」をテーマとして協定校を繋いで留学生・日本人学生も参加し交流を促進するべく開催しているが、学内の参加者は固定し限定的である。

- 3) 交流授業①は60分間、交流授業②③は90分間の設定で行われた。交流授業①が60分間なのは、日本と韓国の授業時間の重なる時間帯に設定する必要があったためである。交流授業②③は高知大学の通常の授業時間の設定で実施された。
- 4) 交流授業①～③に参加した高知大学の学生は、留学生4名は全てに参加したが、日本人学生は3回全てに参加した学生が1名、②③に参加した学生が1名いたが、それ以外の10名の学生は1度のみ参加であった。2回目以降に参加できなかった理由は、新型コロナウイルスに感染したためや熱があるためなどの病気の他に、アルバイトや授業が重なったためとのことである。

参考文献

- 池谷知子(2016)「留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要』5巻、pp.55-70
- 大塚薫(2010)「高知大学におけるチューター制度の現状及び課題」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第4号、高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門、pp.121-138
- 大塚薫(2013)「チューター制度の構築における課題」『高知大学留学生教育』第7号、高知大学国際・地域連携センター国際連携部門、pp.83-102
- 大塚薫(2015)『遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究』平成23-26年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究課題番号23520634 研究成果報告書
- 大塚薫(2016)「外国人留学生に対する支援体制の構築—チューター制度に関するアンケート調査結果からの検証—」『高知大学留学生教育』第10号、高知大学国際連携推進センター、pp.45-61
- 大塚薫(2018)『日本語ネイティブ遠隔参加型グループ別ピア・ラーニング授業の構築に関する実証研究』平成27-29年度科学研究費補助金 基盤研究(C)研究課題番号15K02640 研究成果報告書
- 大塚薫(2021a)「キャリア支援教育を軸としたピア・ラーニング授業の構築—Microsoft Teamsを活用した同期型オンライン教育と対面教育の比較を通して—」『高知大学留学生教育』第14号、高知大学国際連携推進センター、pp.31-45
- 大塚薫(2021b)「学習者の主体的学びを導くハイフレックス型授業の構築」第26回留学生教育学会年次大会 Proceeding、pp.73-74
- 大塚薫(2022)「学習者間の協働学習を主体としたハイブリッド型授業の試み—対面教育と同期型オンライン教育で学ぶ学習者間のインタラクションを通して—」

- 『高知大学留学生教育』第15号、高知大学国際連携推進センター、pp.35-58
- 大塚薫・王勇萍(2013)「日中二大学間協働日本語遠隔授業の構築—授業内容の樹立を中心に—」『高知大学留学生教育』第7号、高知大学国際・地域連携センター国際連携部門、pp.65-81
- 大塚薫・林翠芳(2018)「高大連携による地域文化体験を通じた交流学习活動の教育効果—地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として—」『高知大学留学生教育』第12号、高知大学国際連携推進センター、pp.45-77
- 厚生労働省(2022)「水際対策に係る新たな措置(34)」
<https://www.mhlw.go.jp/content/000993077.pdf>(2023.02.07閲覧)
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子(2019)『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
- 杉村美紀(2018)「高等教育の『国際化』をめぐる新展開と日本の役割—日本の大学は『国際化』により何を指すのか—」『留学交流』Vol.85、pp.1-8
- 高橋美能(2021)「イギリスの学生と東北大生のオンライン交流の意義と効果—双方の学生が共に取り組むプロジェクトを事例に挙げて—」『留学生交流・指導研究』Volume23、国立大学留学生指導研究協議会、pp.135-136
- 林雅子(2021)「留学生の学修機会拡充を目指したハイフレックス(HyFlex)型国際共修授業」第26回留学生教育学会年次大会 Proceeding、pp.21-22
- 山崎真伸(2021)「オンライン言語学習プログラムによる内なる国際化への取組—海外協定大学学生とのオンライン学習プログラムの実践報告—」第26回留学生教育学会年次大会 Proceeding、pp.7-8
- 林翠芳・大塚薫(2022)「オンラインを活用した体験活動型授業の取り組み」『高知大学留学生教育』第15号、高知大学国際連携推進センター、pp.59-99
- Nilsson, B. (2003) Internationalization at Home from a Swedish perspective: The case of Malmo. *Journal of Studies in International Education*, 7(1), pp.27-40

おおつか かおる

(高知大学グローバル教育支援センター教授)

やまぐち としひろ

(高知大学教育学部理工学部門教授)

キム ジェヒョン

(高知大学理工学部門研究員)